

## 2020年6月21日 説教「ヨセフは売られ」

創世記 37章 25～36節

ヨセフはドタンに着くと、兄たちに拘束され、穴の中に入れられたのです。

### 1. イシュマエル人の手に入る (25～27節)

①隊商たち (25)「それから彼らはすわって食事をした。彼らが目を上げてみると、そこに、イシュマエル人の隊商がギルアデから来ていた。らくだには樹膠と乳香と没薬を背負わせ、彼らはエジプトへ下って行くところであった。」長男ルベンが止めたことで、ヨセフを無き者にはできませんでしたが、穴の中に入れて、兄弟達は長年のいら立ちが解消して食事会をしました。見ると、イシュマエル人（遊牧の商人たちの総称）の隊商がギルアデ（ヨルダン川東）からドタンにやってきました。エジプトに向かう途中でした。らくだには、あの三人の博士を彷彿とさせる樹膠（薬、化粧品、高級糊）、乳香（高級香料）、没薬（薬、化粧品）を背負わせていました。いずれも高価なものです。

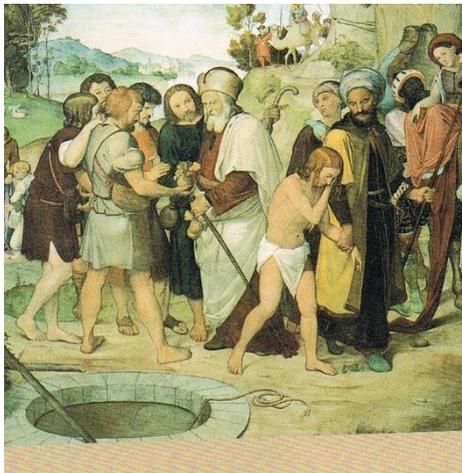
②ユダの提案 (26)「すると、ユダが兄弟たちに言った。『弟を殺し、その血を隠したとて、何の益になろう。』その時に四男ユダが兄弟たちに、一つの意見を出しました。ヨセフを殺して、その死をうまく隠したとしても、全く有益ではないということです。ユダは、兄ルベンと父の気持ちを忖度したのでしょうか。兄弟達の気持ちを、目の前の感情の解消や利益から、別の方向に向けさせます。

③ヨセフを売る案 (27)「さあ、ヨセフをイシュマエル人に売ろう。われわれ彼に手をかけてはならない。彼はわれわれの肉親の弟だから。」兄弟たちは彼の言うことを聞き入れた。ユダが出した具体案は、今近くにいるイシュマエル人たちに、ヨセフを売ってしまうというものでした。そして、兄弟であるヨセフに手をかけてはならないと主張したのです。兄ルベンの言葉に影響を受けていたからでしょうか。すると、兄弟たちも以外にあっさりこの提案を受け入れたのです。

### 2. 兄達の復讐 (28～32節)

①銀 20 枚で(28)「その時、ミデヤン人の商人が通りかかった。それで彼らはヨセフを穴から引き上げ、ヨセフを銀二十枚でイシュマエル人に売った。イシュマエル人はヨセフをエジプトに連れて行った。」ちょうどミデヤン人（アブラハムの子孫で東方に住んだ）が通りかかりました。弟たちはチャンスとみて、即座にヨセフを穴から引き上げます。その上で、ヨセフを銀 20 枚で売ったのです。普通の大人奴隷なら相場は銀 30 枚でありました。ヨセフはまだ、成人年齢に達していないので、銀 20 枚にまとまったのでしょうか。こうして、ヨセフはついに売られてしまい、エジプトに向かうことになるのです。

②穴におらず(29～30)「さて、ルベンが穴のところに帰ってくると、なんと、ヨセフは穴の中になかった。彼は自分の着物を引き裂き、兄弟たちのところに戻って、言った。『あの子がいない。ああ、私はど



こへ行ったら良いのか』兄弟達がヨセフを売り飛ばしてしまった時に、ルベンはどこか外に出ていたのです。用を終えて、帰ってきて、早速に穴の中を確認しましたが、ヨセフはどこにも見当たりません。彼は、着物を引き裂き（悲しみの表現）、兄弟には言ったのです。「穴の中にヨセフがいないのだ。このことで、お前たちは何か知らないか。ああ、どうしたら良いのだ！」。ルベンは動転していました。

③雄やぎの血を（31～32）「**彼らはヨセフの長服を取り、『雄やぎをほふって、その血に、その長服を浸した。そして、そのそでつきの長服を父のところに持って行き、彼らは、『これを私たちは見つけました。どうか、あなたの子の長服であるかどうか、お調べになってください。』と言った。』**さて、ヨセフを売った兄弟達は共謀して、確保しておいたヨセフの長服に雄やぎの血を塗りました。その上で、それを父イスラエルの所に持って行きました。「これを見つけた。ヨセフの長服に似ているので、調べてみてください。」と父親に言ったのです。

### 3. イスラエルの嘆き（33～36節）

①ヨセフのために泣き（33～34）「**父は、それを調べて、言った。『これはわが子の長服だ。悪い獣にやられたのだ。ヨセフはかみ裂かれたのだ。』**ヤコブは自分の着物を引き裂き、荒布を腰にまとい、幾日もの間、その子のために泣き悲しんだ。」イスラエルはそれを見た瞬間、顔色を変えたことでしょうか。それは自分がヨセフに贈った長服であることを、色や形などからすぐにわかったからです。愕然としました。「ああ、この血に染まった具合を見れば、獣にやられてしまったのだろう」。イスラエルは着物を引き裂いた上で、吊いの意味で荒布を腰にまとい、悲しみに悲しんで、何日も過ごしたのです。

②慰めを拒み（35）「**彼の息子、娘たちがみな、来て、父を慰めたが、彼は慰められることを拒み、『私は、泣き悲しみながら、よみにいるわが子のところに下って行きたい。』**と言った。こうして父は、その子のために泣いた。」本当に悲しい時には、人の慰めは受け付けられないのです。息子、娘、嫁たちがやって来ても、イスラエルはむしろそれを拒みました。誰もその気持ちを理解できる人がいるとは思えなかったからでしょう。イスラエルの嘆きと落ち込みようは次の言葉でわかります。「よみにいるわが子のところに下って行きたい！」。もう生きていく希望もない、死にたい、という心地だったのです。

③侍従長ポティファルに（36）「**あのミデヤン人はエジプトで、パロの廷臣、その侍従長ポティファルにヨセフを売った。**」ところで、兄弟たちからヨセフを買いとったミデヤン人はエジプトに着いて、彼を売りました。相手は、エジプトのパロ（王）の廷臣（宮廷の役人）の侍従長であったポティファルという人でした。ヨセフの姿を一目見て、この子は役に立ちそうだと思ったのだと思われます。

《結論》ヨセフの数奇な人生は流転しますが、いよいよ動き始めます。兄達に憎まれ、穴に入れられた後に、イシュマエル人に売られてしまったのです。そして、エジプトへの道に入っていくのです。ヨセフにすれば、いったい何が起きているのか理解できないまま、信頼していた兄たちに捨てられてしまったのです。6月5日に召された横田滋さんは、その人生の多くを娘の救出のために費やしました。めぐみさんが1977年に北朝鮮に拉致されたことがわかったのが、1997年。以後、妻とともに救出運動に挺身。早紀江夫人は新潟時代にキリストに導かれ、滋兄も先年に洗礼を受けられました。その意味では、不幸を通して、夫妻はずばらしい恵みにあずかったといえましょう。娘をとられるという悲しみは、想像を越えています。イスラエル（ヤコブ）も最愛の息子ヨセフを失って、生きる希望を失うほどでありました。使いに送り出したことを後悔もしたことでしょう。しかし、この事件が他の息子たちの仕業であることを知ったなら、もっとショックだったことでしょうか。さらにいえば、それが自らの偏愛の結果であったことは、イスラエル自身は自身、気づいていなかったのでしょうか。彼はかつて自らが父イサクをだましたように、息子たちにだまされることになったのです。

しかし、ヨセフは死んではいませんでした。まずは長兄ルベンを通して、殺されることを免れました。そして、今回はもう一人の兄ユダ（イエス・キリストの系図に出てくる。マタイ1章）によって、危うく命を免れました。ユダの心の中には、ルベンの訴えが強く心に響いていたのでしょうか。必死にヨセフの命を守ろうとするのです。もっとも、ユダの案によってヨセフはイシュマエル人に売られ、エジプトの国に入ることになります。ユダの限界でした。いずれにせよ、多くの兄達の憎悪にもかかわらず、ヨセフは死ぬことなく、その人生は誰も予測しない道へと進んでいくことになるのです。ヨセフからすれば、命を守られてポティファルに買われて新しい人生が始まります。父イスラエルからすれば、叔父ラバンのいるパダン・アラムの時代とは違った、苦しい日々が始まりました。ヨセフがどうしてエジプトに行かねばならなかったのかということ、イスラエルが知るに至るには、長い年月が必要でした。ヨセフの兄弟たちも、一連の出来事の意味を知るには同じだけの日々が必要でありました。

「人は心に自分の道を思い巡らす。しかしその人の歩みを確かなものにするのは主である」（箴言16:9）「人の心には多くの計画がある。しかし主のはかりごとだけが成る」（箴言19:21）。

主はどうして、私をここにおいておられるのであろうかと考えることもありましょう。その意味がわかるのには、少し時が必要かもしれません。しかし、導き主に信頼していくならば、必ずや道は開け、祝福がそこにあるのです。明日のことを思い煩わず（マタイ6:34）、主に行く道を

照らしていただきながら（詩篇 119:105）、今週も歩いていきましょう。